

真行草

三體千字文

巖谷一六書

全

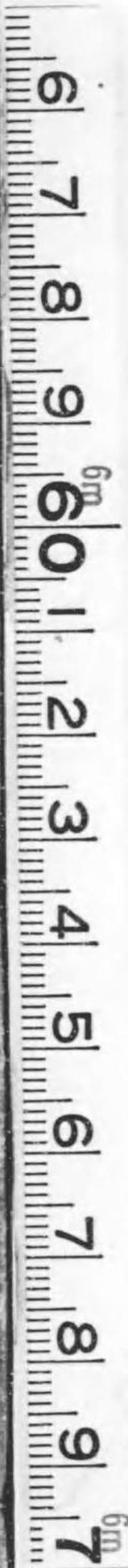
191

特 258

53

10

571



始



積歲皇宮，歷東隅，忠武如乙，壽匹霖。  
自舉義兵，須臾月元光，早已伏。  
天祥，忠臣心事，定何如，遺恨子新淚。  
餘白羽，一箭為自刎，身遂空，美錦。  
囊書

讀史偶筆

卷之二十一



真書千字文

行書千字文

草書千字文



梁 負 外 散 騎 侍

○の横畫長く形をとり  
△同正しく  
○の可迫るぬやう  
△の筆 左右に長く  
○の筆 左に長く  
左右の折合よく  
初筆の方向大切

梁 負 外 散 騎 侍

左右上下の折合よく  
○の可迫るぬやう  
△の筆 左右に長く  
○の筆 左に長く  
左右の折合よく  
初筆の方向大切

采 負 外 散 騎 侍

○の可明き方に注意  
△の筆 左右に長く  
○の筆 左に長く  
左右の折合よく  
初筆の方向大切

郎 周 興 嗣 次 韻

○の筆 左右に長く  
△の筆 左右に長く  
○の筆 左右に長く  
左右の折合よく  
初筆の方向大切

郎 周 興 嗣 次 韻

○の筆 左右に長く  
△の筆 左右に長く  
○の筆 左右に長く  
左右の折合よく  
初筆の方向大切

郎 周 興 嗣 次 韻

○の筆 左右に長く  
△の筆 左右に長く  
○の筆 左右に長く  
左右の折合よく  
初筆の方向大切

天 横畫仰覆  
 地 右ノ上リとす  
 玄 〇ノ處  
 黄 分間と  
 宇 〇ノ處  
 宙 〇ノ處廣

天 すべて中心を失はざるや  
 地 〇の處着なぬや  
 玄 〇の所つかぬや  
 黄 中心に注意  
 宇 〇の所廣く  
 宙 〇の所廣く

天 〇の所廣く  
 地 〇の所廣く  
 玄 〇の所つかぬや  
 黄 中心に注意  
 宇 〇の所廣く  
 宙 〇の所廣く

天 〇の所廣く  
 地 〇の所廣く  
 玄 〇の所つかぬや  
 黄 中心に注意  
 宇 〇の所廣く  
 宙 〇の所廣く

天 〇の所廣く  
 地 〇の所廣く  
 玄 〇の所つかぬや  
 黄 中心に注意  
 宇 〇の所廣く  
 宙 〇の所廣く

天 〇の所廣く  
 地 〇の所廣く  
 玄 〇の所つかぬや  
 黄 中心に注意  
 宇 〇の所廣く  
 宙 〇の所廣く

辰宿列張寒來

三横並直化す 白の位置に注意  
 中心に注意  
 弓と長と離れぬやう 〇の所廣く  
 〇印廣く  
 弓と長と離れぬやう 〇の所廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く

辰宿列張寒來

〇印明けさす  
 〇印明き合に注意  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く

辰宿列張寒來

線の筆注意  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く

暑往秋收冬藏

上の日平に下の日長  
 仰平後  
 日取後の捺  
 文... 注意  
 左右合に注意  
 線により中心に注意  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く

暑往秋收冬藏

下の日はやゝ右方へ  
 〇印廣く  
 木と火は子れぬやう  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く

異往秋收冬藏

少この筆大切  
 〇印廣く  
 〇の所ひろく  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く  
 〇印廣く

閏 餘 成 歲 律 呂

長く  
王や高  
注意  
にて形  
長く  
長く  
強  
上の口は小  
下の口は大

閏 餘 成 歲 律 呂

○印の所廣く  
△印明く  
左右等しく  
成斜な字  
格好とする  
横畫各変化あり  
上下の口  
正しく  
中心と失は  
ざることを

至 終 成 季 律 呂

楷行草ともすべし中心と失はざるやう注意  
○印の所ひろく  
太長く  
終に注意  
廣く長く  
筆順  
○の所注意  
縦畫大切  
最後の筆は  
注意  
○の所廣く  
つせまく  
ひろく

調 陽 雲 騰 致 雨

分間  
注意  
○印の明く  
各線の  
向に  
注意  
上の所廣く  
下の所窄し  
扁は細く  
○の所注意  
左右の釣人大切  
左小右や大  
○の所明く

調 陽 雲 騰 致 雨

○印廣く  
左右の編みに注意  
上の筆法  
中心と得るやう  
馬のつの筆に注意  
乙の所大に  
中心に注意

調 均 雲 律 致 雨

○印の所寬く  
線に注意  
強く  
中心と失はぬやう  
○印廣く  
乙の所注意  
○印の所強く止める  
扁や高し  
○の所筆使に注意

形に注意  
 露 終りの口を大きく  
 結 四注意  
 為 四注意  
 霜 相の位置に注意  
 金 最後の筆大印 三横畫に注意  
 生 三横畫に注意

縦長にならぬやう  
 露 全體の形に注意  
 結 筆使ひに注意  
 為 筆使ひに注意  
 霜 中心に注意  
 金 中心に注意  
 生 中心に注意

△の所の筆に注意  
 露 音や下がり  
 結 音や下がり  
 為 音や下がり  
 霜 音や下がり  
 金 音や下がり  
 生 音や下がり

○印明り  
 麗 △印にて釣合をとり  
 水 △印明り  
 玉 點は低く  
 出 △印廣く  
 岨 山は小さく向く  
 岡 △の所廣く

○印の所強く  
 麗 中心と尖はさるやう  
 水 左右均等に  
 玉 最後の筆に注意  
 出 形體に注意  
 岨 扁旁頭を著しく  
 岡 左右の縦畫 相向す

○印注意  
 秀 縦畫大印  
 水 縦畫大印  
 玉 線の所注意  
 岨 中心と尖はさるやう  
 岨 中心に注意  
 岡 印の所強く





菜 〇印の所ありて合は注意 分間に注意  
 重 〇の所着かぬや 〇の間に注意  
 芥 終直はし 〇の間に注意  
 薑 縦長の字 〇の間に注意  
 海 左右均等に 〇の所つぬや  
 鹹 帝と旁との折合に注意

菜 各分間に注意 中の三點各変化す  
 重 重と筆順に注意 梯形の字  
 芥 〇の間に注意  
 薑 縦直と最後に 〇の間に注意  
 海 帝や高く 〇の間に注意  
 鹹 帝との折合に注意 横長の字

葦 線は中心と見よ 〇印をく  
 重 下直平に 〇印をく  
 芥 〇印をく  
 薑 筆順に注意  
 海 〇印をく  
 鹹 帝小にさす

河 〇印の所寛く 〇印の所寛く  
 淡 〇印の所寛く 〇印の所寛く  
 鱗 〇印の所寛く 〇印の所寛く  
 潛 〇印の所寛く 〇印の所寛く  
 羽 〇印の所寛く 〇印の所寛く  
 翔 〇印の所寛く 〇印の所寛く

河 口を高く 終直の位置肝要  
 淡 點々変化 〇の所着かぬや  
 鱗 帝と旁の折合に注意 帝はなれぬや  
 潛 〇の間に注意  
 羽 〇印 〇の間に注意  
 翔 〇の間に注意

河 〇の所ありて 〇の所ありて  
 淡 〇印をく 〇印をく  
 鱗 〇の間に注意 〇の間に注意  
 潛 〇の間に注意 〇の間に注意  
 羽 〇の間に注意 〇の間に注意  
 翔 〇の間に注意 〇の間に注意



斜めな字  
 分間に注意  
 〇の所寛く整形に注意  
 〇の所あく  
 各畫の向に注意  
 上下寛  
 中窄る  
 〇の所寛く  
 〇の所明く  
 〇の所明く

乃 服 衣 裳 推 位  
 〇の所筆使大切  
 中心に注意  
 形に注意  
 〇印躬屈せざる  
 終畫に注意  
 〇の所寛く  
 圓形の意  
 初筆や長く

乃 叙 衣 裳 推 位  
 線の所丸く勢あり  
 終筆大切  
 〇の所に注意  
 中心と滑らやう  
 〇印の所あく  
 〇の所あく  
 〇の所明く  
 終筆肝要

讓 國 有 虞 陶 唐  
 〇の所長く△の所明く  
 〇の所や、寛く  
 二筆順に注意  
 線の筆に注意  
 〇の所寛く  
 〇の筆味あり

讓 國 有 虞 陶 唐  
 扁旁の折合に注意  
 中の字ほどよく收らやう  
 〇印長く  
 や、縦長の字  
 扁の書方に工夫あり  
 〇印長く

讓 國 有 虞 陶 唐  
 〇の所長く△の所明く  
 〇の所や、寛く  
 二筆順に注意  
 線の筆に注意  
 〇の所寛く  
 〇の筆味あり



垂 圓形に

拱 音ヤ、ニ

平 分間に注意

章 一段二段

愛 分間に注意

育 中心に注意

垂 分間に注意

拱 最後の二點にて形をとり

平 印明く

章 や、縦長の字

愛 圓形の字

育 や、縦長の字

垂 筆順に注意

拱 ナリ注意する所

平 印明く

章 ナリ注意する所

愛 中心に注意

育 ...の所や、左寄り

黎 ○の所長く釣合をとり

首 上横畫長く

臣 分間に注意

伏 ○印の所相寄る

戒 全部の釣合に注意

羌 分間に注意

黎 ○の所や、長く

首 起筆に注意

臣 起筆太く

伏 終筆に注意

戒 中心と得るや

羌 や、縦長の字

架 横畫長

首 中心に注意

五 ○の筆使に注意

伏 ○の筆致大切

戒 中心に注意

羌 ○印は釣合を見よ

分間正しく  
 各部寛に  
 分間注意  
 左右並ぶ立つ意  
 玄以寸  
 〇の所廣く  
 終筆に注意  
 〇の所廣く  
 終筆長く力あり

段引きしり書く  
 〇の所寛く  
 〇の所寛く  
 中心に注意  
 左右相譲る  
 下の横畫長く  
 終筆大切なり

〇の所廣く  
 〇の所寛く  
 〇の筆味あり  
 方形の字  
 起筆に注意  
 分間と形に注意

右下る  
 全畫寛に  
 〇の所長く  
 筆印  
 〇の意  
 筆長く  
 〇の所長く  
 初筆短く  
 寸々低く  
 〇の所廣く  
 〇の所廣く

布一注意すべし所  
 筆太に  
 〇の所長く  
 中の字納まら  
 初筆短く  
 寸々低く  
 〇の所廣く  
 〇の所廣く

一筆注意  
 〇の所廣く  
 〇の所廣く  
 〇の所廣く  
 〇の所廣く  
 〇の所廣く

○の所着かぬやう  
 △の所結體大切  
 白 駒 食 場 化 被  
 △の筆使と方向大切 △の筆柄が一方を止む  
 ○の所あふふに注意 ○の所廣く  
 △の位置ふ合大切 △の筆し味あり 席は高く  
 線はよく釣合と見よ ○の所明く

や、横長の字  
 ○の所廣く △の注意すま可 終筆に注意  
 白 駒 食 場 化 被  
 ○の所明くふ合に注意 ……の筆長く味あり  
 △の筆長く味あり 注意すま可 ○の所廣く ○の筆長く 初點味あり

○の注意すま可 左右の釣合に注意 終筆に形ととら  
 由 由 良 均 化 被  
 や、肉太に書くや ○の所あふ  
 △の通釋 ○の所廣く 左右相應すや ○の所廣く

終筆中心すや、右に 縦畫に意  
 草 木 賴 及 萬 方  
 ○の所寬く ○の所均等に 分間に注意 △前立ち○肩下り ……の筆注意すま可 ○の所廣く  
 ○の所均等に 扁や高く下邊平に 中心に注意 各筆味あり 見よ 長くして味あり

…横畫長く 釣合大切 左右折合よく ……の筆大切なり ……の所右方廣く 斜體の字  
 草 木 賴 及 萬 方  
 中心と尖はさうや △の筆左右に伸ぶ ○印廣く ○の所廣く 中心と得るや 中心肝要

○の横畫長く ……終筆に注意 ……の筆味あり ○の所廣く ……の注意すま可 ……の筆に注意  
 号 木 校 及 万 方  
 子 注意すま可 ○筆力あり 縦畫に注意 注意 ○にて釣合すや



蓋 頭軽く下重く  
横畫の上  
五  
此 横長の字  
身 縦長の字  
髮 二ノ注意  
四 〇の明きニ合ハ注意  
大 筆太

蓋 終畫長く形正  
各横畫変化あり  
此 横長の字  
身 〇の筆味あり  
髮 相互の折合肝要  
四 筆に注意 終筆に注意  
大 〇の明きニ合ハ切 撇や左ノ

善 了ノ注意  
以 終筆肝要  
身 〇の筆味あり  
髮 中心に注意  
四 筆太切なり  
大 釣合大切  
四ノ筆腹に注意 中心に注意

五 〇の明きニ合ハ注意  
常 巾の書方肝要 左右の釣合大切  
恭 〇の明きニ注意  
惟 〇の明きニ注意  
鞠 帝と音と相向ハ意  
養 一ノ注意

五 中心に注意  
常 各分間に注意  
恭 横畫及點排置大切  
惟 〇の明きニ合ハ注意  
鞠 帝の横畫長く  
養 以ノ注意

己 肉木に中心に注意  
当 〇の明きニ合ハ注意  
菩 〇の印廣く  
惟 〇の印廣く  
鞠 〇の印明く 下平に  
養 〇の釣合

豈 敢 毀 傷 女 慕

△は少しく傾く △の筆はく形とす  
中心に注意  
△の筆はく形とす  
中心に注意  
△の明と二合に注意 中の小よく納るや  
△の明と二合を見よ

豈 敢 毀 傷 女 慕

中心と得る字 廓大に旁  
各筆はく形とす 頭平に旁下る 横長の字 各分間に注意  
長く 筆味あり 長く 中心に注意 勿し注意する所 ○印長く強く 八西方長く

考 取 致 備 女 意

つゝ注意する所 くし折要 終筆大印あり 上の筆味あり 筆使に注意 中を空下る  
中心大印 長く ○の所廣く ○印廣く ○印廣く 中心に注意 中心に注意 長く 中心に注意 長く 中心に注意

貞 絜 男 效 才 良

分間に注意 上部廣くや 下部を大きく 線は左右の釣合を見よ 筆太に 終筆はく形とす  
上のは全形に關係す 中心に注意 分間、中心に注意 空方の下や、低く ○の明と二合を見よ ○の所廣く

負 絜 男 效 才 良

縦長の字 中部を小さく 中心と得るや 終筆長く形とす 縦畫に注意 終筆長く形とす  
不注意する所 小に注意 力の横畫長く ○の所廣く 終筆味あり 全部や、左

欠 索 男 效 才 良

○の所廣く ○の明と二合に心せよ 筆力あり 又は注意 筆大印あり 終筆に注意  
欠の意 欠の意 下部大きく ○の所廣く 中心を空はくや 下部筆軽く

知 口低く下平に  
 過 〇の開廣く  
 必 中心と滑りつき  
 改 左高き〇部あり  
 得 分間に注意  
 能 〇の筆強く

知 ヤ、横長く  
 過 〇の開廣く  
 必 注意すき所  
 改 力あり  
 得 頭平に  
 能 帝肉太に

知 中心に注意  
 過 〇の開廣く  
 必 筆順と分間に注意  
 改 〇の筆強く  
 得 中心に注意  
 能 〇の開廣く

莫 下の横書用  
 忘 中心に注意  
 罔 〇の開明と二合に注意  
 談 〇の筆止む  
 彼 〇の筆力に注意  
 短 終筆に注意

莫 中心に注意  
 忘 心の三點に注意  
 罔 左右均等に  
 談 左右の折合に注意  
 彼 終筆味あり  
 短 〇の開廣く

考 〇の筆大切なり  
 立 注意すき所  
 罔 中の字上寄りに  
 談 〇の開明と方大切  
 彼 〇の筆おもしろきあり  
 短 〇の開廣く

上下左右の折合に注意  
 寸位置大印  
 中心に注意  
 筆し注意  
 分間に注意  
 終筆にて形をとり

靡非  
 恃  
 己  
 長  
 信  
 使

筆長く強く鋭く  
 〇の所廣く  
 や肉太れ〇の所廣く  
 長く  
 〇の所廣く  
 筆味あり

や、縦長の字  
 筆長く旁や下を  
 腕筆にて形をとり  
 終筆に注意  
 畫長く  
 筆使に注意

靡  
 恃  
 己  
 長  
 信  
 使

〇の所廣く  
 扁は肉太れ  
 未廣の字  
 〇の横畫長く  
 中心に注意  
 〇印の所廣く

各點畫の排合に注意  
 七の注意をとり  
 〇の筆輕半をとり  
 筆味あり  
 〇の明き方に注意  
 終筆強く鋭く

靡  
 恃  
 己  
 長  
 信  
 使

分間と中心に注意  
 〇の所廣く筆順に注意  
 〇の所や左  
 分間に注意  
 左肉太れや短く  
 筆使に心せよ

初畫長く  
 玉は幅廣く  
 中部窄く  
 左右の折合に心せよ  
 旁や低く  
 分間止く

可  
 覆  
 器  
 欲  
 難  
 量

〇の所廣く口は上穿り  
 〇の所寬く  
 分間に注意  
 線により排合を見よ  
 扁や大きく  
 〇の畫長く

縦畫の位置大印  
 や、縦長の字  
 各位置に注意  
 分間に注意  
 筆順に注意  
 中の横畫長く

可  
 覆  
 器  
 欲  
 難  
 量

中心に注意  
 〇の所廣く下を平に  
 上下ともに平に  
 各筆の連絡を見よ  
 左肉太れ大きく  
 中心に注意

や、小さき字  
 〇によりて分間に注意  
 上中下の折合に注意  
 乙の注意をとり  
 左右の折合大印  
 〇の終筆味あり

可  
 覆  
 器  
 欲  
 難  
 量

筆や、輕快に  
 〇の筆味あり  
 〇の所窮屈ならぬや  
 〇の明き方に心せよ  
 〇の所廣く  
 〇印長く



剋

念

作

聖

德

建

剋

念

作

聖

德

建

刻

念

心

至

法

建

名

立

形

端

表

正

名

立

形

端

表

正

名

立

形

端

表

正

空 谷 傳 聲 震 堂

は全部と蓋ふやう  
○の所廣く  
○の明き方へ心せよ  
向背の筆に心せよ

空 谷 傳 聲 震 堂

中心と得るやう  
筆の連發の意に  
注意  
や、堅長めの字  
二注意すまゝ所  
中心と得るやう

空 谷 傳 聲 震 堂

上廣く下窄る  
二注意すまゝ所  
○の明き方に注意  
○の注意すまゝ所  
○の筆味あり  
○の筆味あり  
○の筆味あり  
○の筆味あり

習 聽 禍 因 惡 積

○の折合に心せよ  
左右折合よく  
○の所廣く下平に  
……の筆太く短く力あり  
二注意すまゝ所  
○の筆味あり  
……の筆味あり  
……の筆味あり  
……の筆味あり

習 聽 禍 因 惡 積

各筆の變化に注意  
心の形あり  
馬の注意すまゝ所  
中の字収まりよく  
筆順と中心に注意  
左右並立

習 聽 禍 因 惡 積

中心に注意  
……の筆に注意  
……の筆に注意  
……の筆に注意  
……の筆に注意  
……の筆に注意  
……の筆に注意  
……の筆に注意





資 父 事 君 曰 嚴

上廣く下を蓋ふ 上の八點書方寸大を要す 上部の「書」方に注意 や、横長に 上下左右の折合

資 父 事 君 曰 嚴

老筆の排置に注意 中心に心せよ 初筆長く形をとる ...の筆、時あり 上の折合よく 曰に注意 老筆の排置に注意

後 父 事 君 曰 嚴

後 右の方高く ...の筆、時あり 中心に心せよ 横廣く ...の筆、時あり 筆順に心せよ

與 敬 孝 當 竭 力

中心と分間れ注意 女に注意 ...の筆、時あり ...の筆、時あり 上を大きく下を蓋ふ ...の折、角立

與 敬 孝 當 竭 力

横畫長く形をとる ...の筆、時あり ...の筆、時あり 中心と分間れ注意 ...の筆、時あり 斜形に心せよ

与 敬 孝 當 竭 力

中心に注意 ...の筆、時あり ...の筆、時あり ...の筆、時あり ...の筆、時あり

忠 則 盡 命 臨 深

中心と分間注意  
 縦の分間正しく  
 中心と分間大切  
 〇の所明、二合に注意  
 左右の分間注意  
 左右の分間注意  
 〇の明、二合に注意

横線により點の位置を見よ  
 〇の筆長  
 左右の分間正しく  
 〇の筆長

忠 則 盡 命 臨 深

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

忠 則 盡 命 臨 深

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

履 薄 夙 興 温 清

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

履 薄 夙 興 温 清

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

履 薄 夙 興 温 清

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長  
 〇の筆長

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

似又  
蘭  
斯  
馨  
如  
松

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

横長の字〇印廣く  
左右〇の明き合に  
注意  
〇の開廣く下平に  
〇の明き方に注意

似  
蘭  
斯  
馨  
如  
松

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

似  
葉  
効  
馨  
如  
松

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

之  
盛  
川  
流  
不  
息

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

之  
盛  
川  
流  
不  
息

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

之  
盛  
川  
流  
不  
息

〇の開廣く  
中心と中間に注意  
扁高く旁下る  
上下の折合に注意  
口は下寄りに  
扁高く旁下る

淵澄取映容止

○の筆長く形ととも 左右の釣合大切  
 ○の筆使みれ注意 中心と分間に注意  
 分間と中心に心せよ

○の筆長く形ととも 左右の釣合大切  
 ○の筆使みれ注意 中心と分間に注意  
 分間と中心に心せよ

淵澄取映容止

終筆「」時あり  
 各筆の抹置に注意 終筆長く強く 終筆時あり  
 ○に「」明に注意 終筆高く

終筆「」時あり  
 各筆の抹置に注意 終筆長く強く 終筆時あり  
 ○に「」明に注意 終筆高く

淵澄取映容止

終筆太く時あり  
 終筆注意す可 収筆順に注意 筆ろ注意  
 ○に注意す可 中心に注意

終筆太く時あり  
 終筆注意す可 収筆順に注意 筆ろ注意  
 ○に注意す可 中心に注意

若思言辭安定

口の位置に注意 心の各筆の位置に注意 分間平しく 左右の折入に注意  
 ○の所迫、ぬき  
 ○の所迫、ぬき

口の位置に注意 心の各筆の位置に注意 分間平しく 左右の折入に注意  
 ○の所迫、ぬき  
 ○の所迫、ぬき

若思言辭安定

中心と分間に注意 心の筆使みれ注意 上の横畫長く 頭平に下ろす  
 女の筆使に注意 大きく下ろす

中心と分間に注意 心の筆使みれ注意 上の横畫長く 頭平に下ろす  
 女の筆使に注意 大きく下ろす

若思言辭安定

終筆「」時あり  
 終筆注意す可 収筆順に注意 筆ろ注意  
 ○に注意す可 中心に注意

終筆「」時あり  
 終筆注意す可 収筆順に注意 筆ろ注意  
 ○に注意す可 中心に注意

驚注意すまき所  
 初刀 低く下平に  
 誠去右の折合方  
 美左同正しく下開  
 慎左開正しく  
 終左右の折合よく 心に心せよ

萬中心と左同に注意  
 初の筆 下に注意  
 誠大切 未廣の字 〇印 廣く  
 美下の横畫長く  
 慎下 注意すまき所  
 終終筆 左方 長く 〇の所 廣く 下 低く 左右の折合に注意 中心に注意 〇の字 肉太に

考注意すまき所  
 初注意すまき所  
 味注意  
 美尖 終筆 下に 形ととも  
 性〇の筆 廣く  
 終〇の筆 廣く 〇印 廣く 下 高く

宜〇の所 迫らぬや  
 今〇の筆 左に 鈎合よく  
 榮上部引 鈎合よく  
 業上の横畫 長く 形ととも  
 所〇の明き 工合を見よ  
 基中心と左同 大印

宜〇の所 明き 方 均等  
 令〇の明き 工合を見よ  
 榮注意すまき所  
 業〇の筆 左右に 伸ぶ  
 所〇の筆 左右に 伸ぶ  
 基〇の筆 左右に 伸ぶ

宜上 〇の筆 下と 蓋ふ 初筆 肉太に 強く 〇の筆 左右に 長く 形ととも 終筆 均等  
 令〇の筆 廣く 中心と左同に 注意  
 榮〇の筆 廣く 中心と左同に 注意  
 業〇の筆 廣く 中心と左同に 注意  
 所〇の筆 廣く 中心と左同に 注意  
 基〇の筆 廣く 中心と左同に 注意



存 以 甘 棠 去 而

一一の筆長く鋭く  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて

存 以 甘 棠 去 而

分間と中心に心せよ  
〇の折はなれて  
一一の筆長く  
上部大に下と蓋し  
初筆長く  
一一の筆長く  
子 注意すなり所  
〇の折はなれて  
中心と折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて

存 心 甘 棠 去 而

存...の筆は注意  
横長の字  
一一の筆は注意  
上大きく  
一一の筆は注意  
〇の折はなれて  
中心に心せよ  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて  
〇の折はなれて

益 詠 樂 殊 貴 賤

下の横は長く形をよ  
一一の筆は注意  
全形圓く  
〇の筆は注意  
中の横は長く  
中の横は長く  
中心と折はなれて  
中心と折はなれて  
中心と折はなれて  
中心と折はなれて  
中心と折はなれて  
中心と折はなれて  
中心と折はなれて

益 詠 樂 殊 貴 賤

一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意

益 詠 樂 殊 貴 賤

中程中廣く  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意  
一一の筆は注意

禮 別 尊 卑 上 和

○の可明き方に注意  
△の筆を左へ伸べし形をとり中の横畫長く  
…の筆長く  
下の横畫長く  
…の筆に注意

禮 別 尊 卑 上 和

左右の折合に心せよ  
川…の意  
中の字引をいめて  
取畫中心よりや、右、…の筆、味あり  
口は低く小さく

禮 可 考 平 上 和

○の可明き方に注意  
△の筆を左へ伸べし形をとり中の横畫長く  
…の筆長く  
下の横畫長く  
…の筆に注意

下 睦 夫 唱 婦 隨

○の可明き方に注意  
△の筆を左へ伸べし形をとり中の横畫長く  
…の筆長く  
下の横畫長く  
…の筆に注意

下 睦 夫 唱 婦 隨

○の可明き方に注意  
△の筆を左へ伸べし形をとり中の横畫長く  
…の筆長く  
下の横畫長く  
…の筆に注意

下 睦 夫 唱 婦 隨

○の可明き方に注意  
△の筆を左へ伸べし形をとり中の横畫長く  
…の筆長く  
下の横畫長く  
…の筆に注意









造お同正しく  
 次...の筆  
 弗中心とお同に注意  
 離...の筆  
 節まの下方  
 義上部引締り

造△の筆左へ長く  
 次△の筆左へ長く  
 弗△の筆左へ長く  
 離△の筆左へ長く  
 節△の筆左へ長く  
 義△の筆左へ長く

造△の筆長く形をとる  
 以△の筆長く形をとる  
 弗△の筆長く形をとる  
 離△の筆長く形をとる  
 節△の筆長く形をとる  
 義△の筆長く形をとる

廉...の筆  
 退...の筆  
 顛...の筆  
 沛...の筆  
 匪...の筆  
 虧...の筆

廉△の筆長く  
 退△の筆長く  
 顛△の筆長く  
 沛△の筆長く  
 匪△の筆長く  
 虧△の筆長く

廉△の筆長く  
 退△の筆長く  
 顛△の筆長く  
 沛△の筆長く  
 匪△の筆長く  
 虧△の筆長く

生の意性の筆致静に心せよ情字の上部横に長く逸の筆に注意心の筆に注意動字の下部横に長く

性左右の折合に注意静の筆に注意情字の位置大印逸中心に注意心去筆の向背に注意動力の筆致

性の可廣く中心に心せよ静の可廣く中心に心せよ情の可廣く中心に心せよ逸の可廣く中心に心せよ心の可廣く中心に心せよ動の可廣く中心に心せよ

神の筆に注意疲の筆に注意守の筆に注意真の筆に注意志の筆に注意満の筆に注意

神左右の折合に心せよ疲の筆に注意守上大きく下を益せよ真の筆に注意志上下の折合よく満字の字収まりよく

神の筆に注意疲の筆に注意守の筆に注意真の筆に注意志の筆に注意満の筆に注意



都 邑 華 夏 東 西

都: 上の上下共に下ろす。下の筆は形をとり、中間正しく、収まるに注意。  
 邑: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 華: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 夏: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 東: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 西: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。

都 邑 華 夏 東 西

都: 上の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 邑: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 華: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 夏: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 東: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 西: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。

考 考 考 考 考

考: 上の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 考: 上の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 考: 上の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 考: 上の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 考: 上の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。

二 京 背 芒 面 洛

二: 横書き長くと下と並ぶ。上下の割合を注意。下の筆は中心に下ろす。  
 京: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 背: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 芒: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 面: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 洛: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。

二 京 背 芒 面 洛

二: 横書き長くと下と並ぶ。上下の割合を注意。下の筆は中心に下ろす。  
 京: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 背: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 芒: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 面: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 洛: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。

二 京 背 芒 面 洛

二: 横書き長くと下と並ぶ。上下の割合を注意。下の筆は中心に下ろす。  
 京: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 背: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 芒: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 面: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。  
 洛: 下の筆は中心に下ろす。下の筆は中心に下ろす。

浮三點相向しやう  
 滑音の右同し  
 據音の右同し  
 涇左右折合よ  
 宮ハ下も蓋ふ  
 殿左右折合よ

○の開廣く

○の開明き心せよ

○の音の右同し

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切

浮子に注意  
 滑音の上都大  
 據音の中心に注意  
 涇又上  
 宮下の口の書方大切  
 殿各筆の揃目大切

○の開明き心せよ

○の開廣く

○の音の右同し

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切

浮上の二點軽く  
 滑ひらに注意  
 據右のハに注意  
 涇一のハに注意  
 宮三のハに注意  
 殿上下二段に見ゆ

○の開明き心せよ

○の開明き心せよ

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切

盤一の筆太切  
 鬱各筆の揃目大切  
 樓女のハに注意  
 觀音の上都大  
 飛ハ同正し  
 驚上下二段に見ゆ

○の開明き心せよ

○の開明き心せよ

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切

盤中心と右同し  
 鬱寸の位置に注意  
 樓中心と右同し  
 觀一の筆太切  
 飛ハ同正し  
 驚上下折合よ

○の開明き心せよ

○の開明き心せよ

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切

浮注意  
 滑中の横畫長  
 據右のハに注意  
 涇一の筆太切  
 宮ハ同正し  
 殿上下折合よ

○の開明き心せよ

○の開明き心せよ

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切

○の筆太切





甲帳對楹肆筵

取筆畫の書下大印  
しに注意  
一の筆一所要  
四の位置に注意  
左右譲り合の相  
一の筆一又此心よ

啓畫中心より右  
巾の口の所廣く  
○の筆一左に長く  
左右折合よく  
分間と中心に心せよ  
此小く中心に印

甲帳對楹肆筵

啓畫太く力あり  
長に注意  
○の筆一低く左を抱く  
○の筆一右に長く  
○の筆一中心に心せよ  
頭手に下る  
○の筆一明き方に注意

中心と分間に心せよ  
左右折合よく  
○の筆一中心に印  
右太く右に寄す  
頭手に下る  
○の筆一明き方に注意

甲帳對楹肆筵

甲に注意  
長に注意  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
左右折合よく  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ

筆太く分間大印  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
中心と分間に注意  
○の筆一中心に心せよ  
左右折合よく  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ

設席鼓瑟吹笙

○の筆一長く  
巾の書下大印  
高低く下平に  
上下左右の折合よく  
一の筆一  
一の筆一

上下左右均分  
一の筆一斜く方向に注意  
分間正しく  
中心と分間に注意  
口は高く  
中心と分間に注意

設席鼓瑟吹笙

一の筆一太長く  
ナに注意  
左右の折合よく  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ

初點右より  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ

設席鼓瑟吹笙

一の筆一太長く  
ナに注意  
左右の折合よく  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ

左は長く右に寄す  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ  
○の筆一中心に心せよ

陞階納陸弁轉

○の可明く方心せよ  
白の位置大切  
旁の筆は下平に  
比の筆は方印  
△の横は長く  
一の筆は方心せよ

陞階納陸弁轉

土の位置に注意  
○の筆は右に注意  
左右折合よく  
中心と右同注意  
○の筆は方印  
○の筆は方印  
○の筆は方印

陞階納陸弁轉

○の可明く方心せよ  
○の可明く方心せよ  
○の可明く方心せよ  
○の可明く方心せよ  
○の筆は長く形をとり  
左や、高く

疑星右通廣内

疑星右通廣内

疑星右通廣内

左達承明既集  
左達承明既集  
左達承明既集

墳典亦聚羣英  
墳典亦聚羣英  
墳典亦聚羣英

杜稟鍾繇涑書

杜稟鍾繇涑書

杜豪鐘繇涑書

駢經府羅將相

駢經府羅將相

駢經府羅將相

路俠槐卿戶封

路俠槐卿戶封

路俠槐卿戶封

八縣家給千兵

八縣家給千兵

八縣家給千兵

高冠陪輦驅轂  
高冠陪輦驅轂  
高冠陪輦驅轂  
高冠陪輦驅轂

振纓世祿侈富  
振纓世祿侈富  
振纓世祿侈富  
振纓世祿侈富

車駕肥輕築功

車駕肥輕築功

車駕紀輕榮功

茂實勒碑刻銘

茂實勒碑刻銘

茂實勒碑刻銘



磻溪伊尹佐時

磻溪伊尹佐時

磻溪伊尹佐時

阿衡奄宅曲阜

阿衡奄宅曲阜

阿衡奄宅曲阜

微旦孰營桓公

微旦孰營桓公

微旦孰營桓公

匡合濟弱扶傾

匡合濟弱扶傾

匡合濟弱扶傾

綺迴漢惠說感

綺迴漢惠說感

綺迴漢惠說感

武丁俊又密勿

武丁俊又密勿

武丁俊又密勿

多士寔寧晉楚

多士寔寧晉楚

多士寔寧晉楚

更霸趙魏困橫

更霸趙魏困橫

更霸趙魏困橫

假途滅虜踐土

假途滅虜踐土

假途滅虜踐土

會盟何遵約法

會盟何遵約法

會盟何遵約法

韓弊煩刑起翦

韓弊煩刑起翦

韓契似西起翦

頗救用軍竅精

頗救用軍竅精

頗救用軍竅精

宣威沙漠馳譽

宣威沙漠馳譽

宣威沙漠馳譽

丹青九州禹跡

丹青九州禹跡

丹青九州禹跡

百郡秦并嶽宗

百郡秦并嶽宗

百郡秦并嶽宗

恒岱禪主云亭

恒岱禪主云亭

恒岱禪主云亭



鴈門紫塞鷄田

鴈門紫塞雞田

府門氣室牲田

赤城昆池碣石

赤城昆池碣石

赤城昆池碣石

鉅野洞庭曠遠  
鉅野洞庭曠遠  
鉅野洞庭曠遠

縣邈巖岫杳冥  
縣邈巖岫杳冥  
縣邈巖岫杳冥

治本於農務茲  
治本於農務茲  
治本於農務茲

稼穡併載南畝  
稼穡併載南畝  
稼穡併載南畝

我藝黍稷稅熟

我藝黍稷稅熟

我藝黍稷稅熟

貢新勸賞黜陟

貢新勸賞黜陟

貢新勸賞黜陟

孟軻敦素史魚

孟軻敦素史魚

孟軻敦素史魚

秉直庶幾中庸

秉直庶幾中庸

秉直庶幾中庸

勞謙謹勅聆音

勞謙謹勅聆音

勅謹勅聆音

察理鑑貌辯色

察理鑑貌辯色

察理鑑貌辯色

貽厥嘉猷勉其

貽厥嘉猷勉其

昭勳嘉猷勉其

祗植省躬譏誡

祗植省躬譏誡

祗植省躬譏誡

寵增抗極殆辱

寵增抗極殆辱

寵增抗極殆辱

近耻林舉幸即

近耻林舉幸即

近耻林舉幸即



兩疏見機解組

兩踈見機解組

苟訪見機解組

誰逼索居閑處

誰逼索居閑處

誰逼索居閑處

沈默寂寡求古

沈默寂寡求古

沈默寂寡求古

尋論散慮逍遙

尋論散慮逍遙

尋論散慮逍遙

欣奏累遣感謝

欣奏累遣感謝

欣奏累遣感謝

歡招渠荷的歷

歡招渠荷的歷

歡招渠荷的歷

園  
莽  
抽  
條  
枇  
杷

園  
莽  
抽  
條  
枇  
杷

園  
莽  
抽  
條  
枇  
杷

晚  
翠  
梧  
桐  
早  
彫

晚  
翠  
梧  
桐  
早  
彫

晚  
翠  
梧  
桐  
早  
彫

陳根委翳落葉

陳根委翳落葉

陳松委翳落葉

飄飄遊鶻獨運

飄飄遊鶻獨運

飄飄遊鶻獨運

凌摩絳霄  
耽讀

凌摩絳霄  
耽讀

凌摩絳霄  
耽讀

翫市寓目  
囊箱

翫市寓目  
囊箱

翫市寓目  
囊箱

易輜攸畏屬耳

易輜攸畏屬耳

易輜攸畏屬耳

垣墉具膳滌飯

垣墉具膳滌飯

垣墉具膳滌飯

適口充腸飽餒

適口充腸飽餒

適口充腸飽餒

享宰飢厭糟糠

烹宰飢厭糟糠

享宰飢厭糟糠



親戚故舊老少

親戚故舊老少

親戚故舊老少

異糧妾御績紡

異糧妾御績紡

異糧妾御績紡

侍巾帷房紈扇

侍巾帷房紈扇

侍巾帷房紈扇

負潔銀燭燁煌

負潔銀燭燁煌

負潔銀燭燁煌

晝眠夕寐  
籟籃笋

晝眠夕寐  
籟籃筍

晝眠夕寐  
籟籃笋

象床絃歌  
酒讌

象床絃歌  
酒讌

象床絃歌  
酒讌

接杯舉觴矯手

接杯舉觴矯手

接杯舉觴矯手

頓足悅豫且康

頓足悅豫且康

頓足悅豫且康

嫡後嗣續祭祀

嫡後嗣續祭祀

嫡後嗣續祭祀

蒸嘗稽顙再拜

蒸嘗稽顙再拜

蒸嘗稽顙再拜

悚懼恐惶  
賤牒

悚懼恐惶  
賤牒

悚懼恐惶  
抄探

簡要顧答  
審詳

簡要顧答  
審詳

簡要顧答  
審詳

骸垢想浴執熱

骸垢想浴執熱

骸垢想浴執熱

願涼驢騾犢持

願涼驢騾犢持

似涼驢騾犢持

駭躍超驤誅斬

駭躍超驤誅斬

詭譎劫讓誅斬

賊盜捕獲叛亡

賊盜捕獲叛亡

賊盜捕獲叛亡



布射遼丸嵇琴

布射遼丸嵇琴

布射遼丸嵇琴

阮嘯恬筆倫紙

阮嘯恬筆倫紙

阮嘯恬筆倫紙

鈞巧任鈞釋紛

鈞巧任鈞釋紛

鈞巧任鈞釋紛

利俗並皆佳妙

利俗並皆佳妙

利俗並皆佳妙

毛施泚姿工嘖

毛施泚姿工嘖

毛施泚姿工嘖

妍笑年矢每催

妍笑年矢每催

妍笑年矢每催

羲暉朗曜旋璣

羲暉朗曜旋璣

羲暉朗曜旋璣

懸軒晦魄環照

懸軒晦魄環照

和絳晦魄環照

指薪脩祛永綏

指薪脩祛永綏

指薪脩祛永綏

吉劬矩步引領

吉劬矩步引領

吉劬矩步引領

俯仰廊廟束帶

俯仰廊廟束帶

俯仰廊廟束帶

矜庄徘徊瞻眺

矜庄徘徊瞻眺

矜庄徘徊瞻眺

孤陋寡聞愚蒙

孤陋寡聞愚蒙

孤陋寡聞愚蒙

等請謂語助者

等請謂語助者

等請謂語助者

焉哉乎也  
焉哉乎也  
焉哉乎也

明治壬辰夏日  
巖谷修書





片岡琴湖編 加藤樂山書

# 筆法書道教本

半紙和紙刷  
和本綴 全一冊  
赤字解釋入  
百拾五頁  
特價六拾錢  
送料八錢

## 目次既要

○永字八法の解説 ○永字八法七十二例式 ○楷書・行書・草書の運筆法 ○執筆法と腕法 ○八筆勢のこと ○結構分類字法  
○注意事項に就いて ○應用字例 ○大字結構八十四法 ○楷書基本運筆法 ○楷書分類字 ○行書基本運筆法 ○行書普通用語  
文字 ○草書基本運筆法 ○草書普通書翰用文字 ○平假名 ○變体平假名 ○假名二・三・四・五・字聯綿 ○ペン字平假名 ○ペン  
字・楷・行・草書 ○履歴書の書方 ○ペン用箋手紙の書方 ○ペン端書の書方

近時東洋文藝復興發達の著しきにつれ書道の研究練習盛んになり、能筆惡筆は出世の遲速に關係する時代になつた。書道は天才天分に俟るものではない。小野道風の例にある通り平生の練習こそ眞の能書家を造るものである。本書は此意を旨として練習に先づ必要なる書法を叮嚀に解釋説明しある事は中等教科書及び一般向きの参考書として便利且重寶であると共に世に誇るに足るものと信す。

## 千字文讀方

本文の右傍に附したる片假名は音讀にして左傍の平假名は訓讀乃ち讀方なり

### 勅員外散騎侍郎周興嗣次韻

天地玄黃	宇宙洪荒	日月盈昃	辰宿列張	寒來暑往	秋收冬藏
閏餘成歲	律呂調陽	雲騰致雨	露結為霜	金生麗水	玉出崑岡
劍號巨闕	珠稱夜光	果珍李柰	菜重芥薑	海鹹河淡	鱗潛羽翔
龍師火帝	鳥官人皇	始制文字	乃服衣裳	推位讓國	有虞陶唐
弔民伐罪	周發殷湯	坐朝問道	垂拱平章	愛育黎首	臣伏戎羌
遐邇壹體	率賓歸王	鳴鳳在樹	白駒食場	化被草木	賴及萬方
蓋此身髮	四大五常	恭惟鞠養	豈敢毀傷	女慕貞絜	男效才良
知過必改	得能莫忘	罔談彼短	靡恃己長	信使可覆	器欲難量
墨悲絲染	詩讚羔羊	景行維賢	克念作聖	德建名立	形端表正

空谷傳聲。虛堂習聽。禍因惡積。福緣善慶。尺璧非寶。寸陰是競。  
資父事君。曰嚴與敬。孝當竭力。忠則盡命。臨深履薄。夙興溫清。  
似蘭斯馨。如松之盛。川流不息。淵澄取映。容止若思。言辭安定。  
篤初誠美。慎終宜令。榮業所基。籍甚無竟。學優登仕。攝職從政。  
存以甘棠。去而益詠。樂殊貴賤。禮別尊卑。上和下睦。夫唱婦隨。  
外受傳訓。入奉母儀。諸姑伯叔。猶子比兒。孔懷兄弟。同氣連枝。  
交友投分。切磨箴規。仁慈隱惻。造次弗離。節義廉退。顛沛匪虧。  
性靜情逸。心動神疲。守眞志滿。逐物意移。堅持雅操。好爵自縻。  
都邑華夏。東西二京。背芒面洛。浮渭據涇。宮殿盤爵。樓觀飛驚。  
圖寫禽獸。畫綵仙靈。丙舍傍啓。甲帳對楹。肆筵設席。鼓瑟吹笙。  
陞階納陛。弁轉疑星。右通廣內。左達承明。既集墳典。亦聚群英。  
杜蘅鍾繇。漆書辟經。府羅將相。路俠槐卿。戶封八縣。家給千兵。

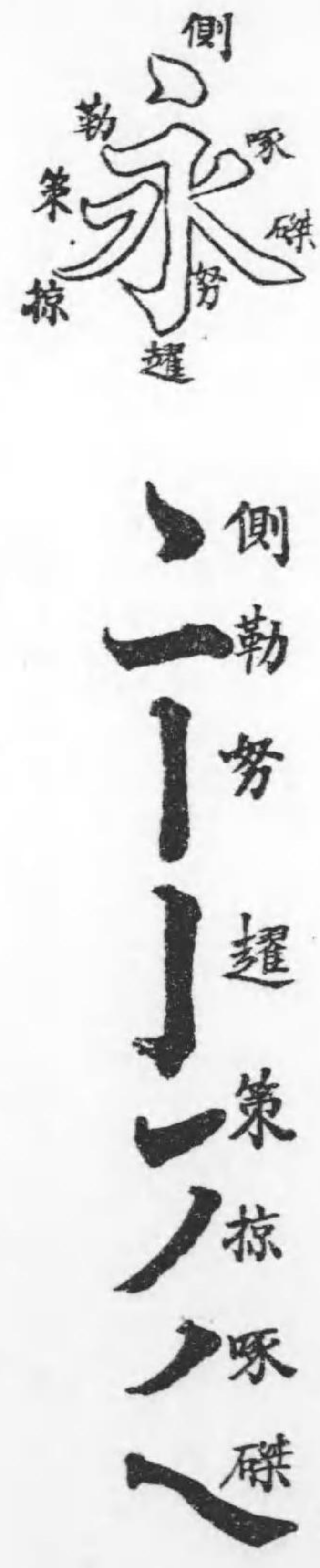
高冠陪輦。驅轂振纓。世祿侈富。車駕肥輕。策功茂實。勒碑刻銘。  
磻溪伊尹。佐時阿衡。奄宅曲阜。微旦孰營。桓公匡合。濟弱扶傾。  
綺回漢惠。說感武丁。俊乂密勿。多士寔寧。晉楚更霸。趙魏困橫。  
假途滅虢。踐土會盟。何遵約法。韓弊煩刑。起翦頗牧。用軍最精。  
宣威沙漠。馳譽丹青。九州禹跡。百郡秦拜。嶽宗恒岱。禪主云亭。  
鴈門紫塞。雞田赤城。昆池碣石。鉅野洞庭。曠遠縣邈。巖岫杳冥。  
治本於農。務茲稼穡。俶載南畝。我藝黍稷。稅熟貢新。勸賞黜陟。  
孟軻敦素。史魚秉直。庶幾中庸。勞謙謹勅。聆音察理。鑑貌辨色。  
貽厥嘉猷。勉其祗植。省躬譏誡。寵增抗極。殆辱近耻。林宰幸卽。  
兩疏見機。解組誰逼。索居閑處。沈默寂寥。求古尋論。散慮逍遙。  
欣奏累遣。感謝歡招。渠荷的歷。園莽抽條。枇杷晚翠。梧桐早凋。  
陳根委翳。落葉飄颻。遊鷗獨運。凌摩絳霄。耽讀氾市。寓目囊箱。

易輜攸畏。屬耳垣墻。具膳滌飯。適口充腸。飽飫烹宰。飢厭糟糠。  
 親戚故舊。老少異糧。妾御績紡。侍巾帷房。紈扇圓潔。銀燭焯焯。  
 書眠夕寐。藍筍象床。絃歌酒讌。接杯舉觴。矯手頓足。悅豫且康。  
 嫡後嗣續。祭祀蒸嘗。稽顙再拜。悚懼恐惶。牋牒簡要。顧答審詳。  
 骸垢想浴。執熱願涼。驢騾犢特。駭躍超驤。誅斬賊盜。捕獲叛亡。  
 布射遼丸。嵒琴阮嘯。恬筆倫紙。鈞巧任鈞。釋紛利俗。並皆佳妙。  
 毛施淑姿。工嘔研笑。年矢每催。羲暉朗曜。旋璣懸幹。晦魄環照。  
 指薪脩祜。永綏吉劬。矩步引領。俯仰廊廟。束帶矜莊。徘徊瞻眺。  
 孤陋寡聞。愚蒙等誥。謂語助者。焉哉乎也。

千字文讀方(終)

永字八法の解説

書を學ぶには、筆法の根基となるべき、永字八法のことからを、知らなければならぬ、永字八法とは、永字を八つの書き方に分けたもので、則ち、側、勒、努、趯、策、掠、啄、磔の八つである、左に之を示さんに、



之を分解すると。  
 側 勒 努 趯 策 掠 啄 磔  
 と云ふ譯になる。

此の、永字八法は、支那の晉の(衛夫人)が發明して、之を(王羲之)に教へたもので、文字の變化して字體を成さしむる所の法である。

「側」とは、そばだつ、又かたふく、の字義で筆の臥すことを嫌ふ、則ち筆を平かにせず、筆の鋒を側て、右から左に遣る心持で書くのである、之れが、總ての點の元となるのである。

「勒」とは、をさへるの字義で、眞直に平たく引いては、いかぬ、眞中が少し高く兩端の頭をば、筆の力を以て之を抑へなければならぬ、これが横の字畫の元である。

「努」とは、はげむ又力をあはすの字義で、一息に力を入れて、はげむ心持で引張るのである、而かも筆鋒を直ぐにしてはならぬ、筆鋒を直ぐにすると力を殺ぐ、即ち左に筆鋒を藏めて右にて抑へ下に到るに従ひ徐々に力を入れなければならぬ、之れが縦畫の元である。

「趯」とは、をどる、の字義で、筆鋒をうづくませて勢を得ると同時に、はねるのである。はねいたすと共に軽く筆鋒を收めなければならぬ。

「策」とはむちうつ、の字義で即ち、むちを振り擧ぐるやうに、筆に少しく力を入れて、はねる心持で、斜めに右に向つて筆鋒を收むるのである。即ち短かい横畫の元である。

「掠」とは、かすめるの字義で、拂ひ過ぐることである、筆に力を入れて抑へると同時に、軽く左斜めに筆鋒をはねるのである。

「啄」とは、つばむ、の字義で鳥の物を啄むが如く、初め筆を打ち込むと同時に直ぐ左斜めに疾くはねるのである、之れが撇の元である。

「磔」とは張り開くの字義で、初め筆鋒を打ち込むと同時に、右へ少しく高く擧げ直ちに右斜下に下して筆鋒を留むると共に疾く引きはねるのである、書法では字畫の右に下れるもの、稱へとしてある、今は之を捺と云つてゐる。

更に、分解的に之を委しく説明すると、

點の元である「側」は(起、走、住、疊、圍、回、藏、落)の八つに記してあるやうに、起り、走り、住まり、疊み、圍み、回り、藏む、落つ、と云ふ。具合に筆穎を紙上に着くると同時に、右へ曲げて抑へ、更に左へ回すと共に、少しく擧げて、挑るや、否

「勒」の如くなる、又之を縦畫にすれば

のやうになる、而して、總ての畫に此の(起、走、疊、圍、住、回、藏、落)が含まれてゐるので、之れによつて字の妙味が出て來るのである。左に其例を擧げて之を示す。



夫から、永字八法、を應用すべき、基本的書體なるものが、七十二ある、之を（永字八法七十二例式）と云ふ、左に之れが式字を示す。

永字八法七十二例式

怪石	龍爪	杏仁	梅核	龜頭	瓜種	鐵鈴	群鵲	懸珠
蠅脚	垂珠	羊角	雞頭	菱米	堅石	玉紫	石楯	折釘
吟蛩	鐵城	邑	駝頭	阜	走之	舞鶴	鐵柱	垂針

鳥雛	曲尺	馬橋	象笏	蓮化	緊勾	彎筆	鳳翅	鸞翅
玉勾	浮鸞	漫勾	飛雁	竹箨	獅口	龍尾	寶蓋	聚水
散水	犁梁	搭勾	金錐	虎牙	橫叉	新月	鈎鏹	懸戈
疊鳥	蛇頭	飛帶	閑鴉	柳箕	雙ヶ	犀角	鳥啄	蟠龍

戲蝶 木人 金刀 鳴鴨 遊魚 漫遊魚 有勾 無勾 女中書

楷書の運筆法

習字には、楷、行、草、の三つありて、何れを先きに學ぶべきかに就ては二通りある、楷書を先きに學ぶと宜しいと云ふ説と、行書を先に學ぶと好いと云ふ説とがある、普通から云ふと、楷書から學ぶのが順序である。

(楷書)を、眞書、正書、とも云ふ、さうして、之を學ぶには、矢張り、永字八法から、始めなければならぬ、永字八法を習へば、自然と點の打ち方や畫の引き方撇ね方等を覺えて之を萬字に應用することが出来る、先づ間架結構と云ふ、所謂文字の組立のことを知れば能く判かる、間架とは、縦横の畫の間を廣い狭いの不釣合のないやうに、按排好く書くのである、例へば「書輔重律」の字の如きがそれである、結構とはそれく字形によつて其の長短、細大、の釣合を取ることを云ふので、文字の形を整へる爲めに要するのである、元來楷書の根本的要素は、字体の方正を主とし、偏倚な

るを避くると同時に、點や畫の優美なることに心を注がねばならぬのである、須らく筆を下す時に、左を顧み右を眇るべきである、斯くするときには、矚ち意足りて神完きを致すのである、一体楷書には、力強い所に穩かなる、緩みがないと、文字剛張りて妙味がない、又穩か過ぎては却つて力がなく、纖弱に流れるものである、故に楷書を書くには、どうしてしも、三折三抑、と云ふことが必要で、三折三抑がないと、字に反りと、  
 一 と云ふやうに、初めに力を入れ少しく上げて中間に緩みが乏しい、一の字を引くにも、  
 一 みを持たせさうして尾端に又力を入れる即ち最初に點を打つ心持で引き、尾端に又點を打つ、心持で抑へ、其中間を結び附けるやうにすれば、自然と反りも力もある、字を書けることになるのである、點や勾や撇なども矢張り此れに倣へば宜しいのである。

行書の運筆法

行書は、楷書のやうに、硬く角張らないやうに、可成圓轉なるを貴ぶものである、其楷書に近いものを、眞行、と云ひ、草書、に近いものを、草行、と云つてある、詰まり、行書は、楷書、と、草書、との中間を取ればよいのである、只楷書のやうな直なるを避けて、曲がり角を柔げ少しく丸味を覺ゆるやうになし、撇ね口を切々にならないやうにすればよい、點の如きも筆穎を包むやうに輕

く打ち込み、畫の如きは弓なりのやうに、しなやかに引き、波筆、即ちはねるところは筆遣ひの行  
くに任せてはねるやうにする、此の行書は、支那後漢の（劉德昇）と云ふ人が作つたもので、其の  
起りを正書の小説で務めて簡易に従ひ、相間流行するが故に之を行書と云つてゐる、之を判り易く  
云ふと正書即ち楷書を少しく略したもので可成簡單にして續き行くと云ふ意味合になるのである。

### 草書の運筆法

草書は、行書をくづして、流暢聯綿的に書くのである、其の起りは字畫を略して、まつはりも  
つれること草の如くすると云ふ所から出たものである、連綿的とは云ひながら此草書と云ふものは、  
其運筆に餘程緩急遅速の度合と、曲節の所を慎まないと全く書體を失つて死字となるものである、  
元來草書には、起應變化と云ふものがあつて字の鈞合を取つて其字體を調整せしむるものである、  
譬へば、起 **ま** 應 起 **め** 應 起 **免** 應 等の文字の如きはそれである、  
夫から、又留筆、遺筆、推筆、繼筆、廻筆、屈筆、移筆、拔筆、横推筆、縦推筆、と云ふものがあ  
る、之を例せば左の如きものである。

留筆 遺筆 推筆 繼筆 廻筆 屈筆 移筆 拔筆 横推 縦推筆  
つし ん ん ん 子 つ 津 る つ 十

草書は、以上の如く廻轉自在を貴ぶと雖も筆遣ひの輕重と筆力の抑へと抜き方によつて字の巧拙  
をなすものであれば矢張り、楷書の如く自然三折的聯綿の方法を用るなければならぬのである。

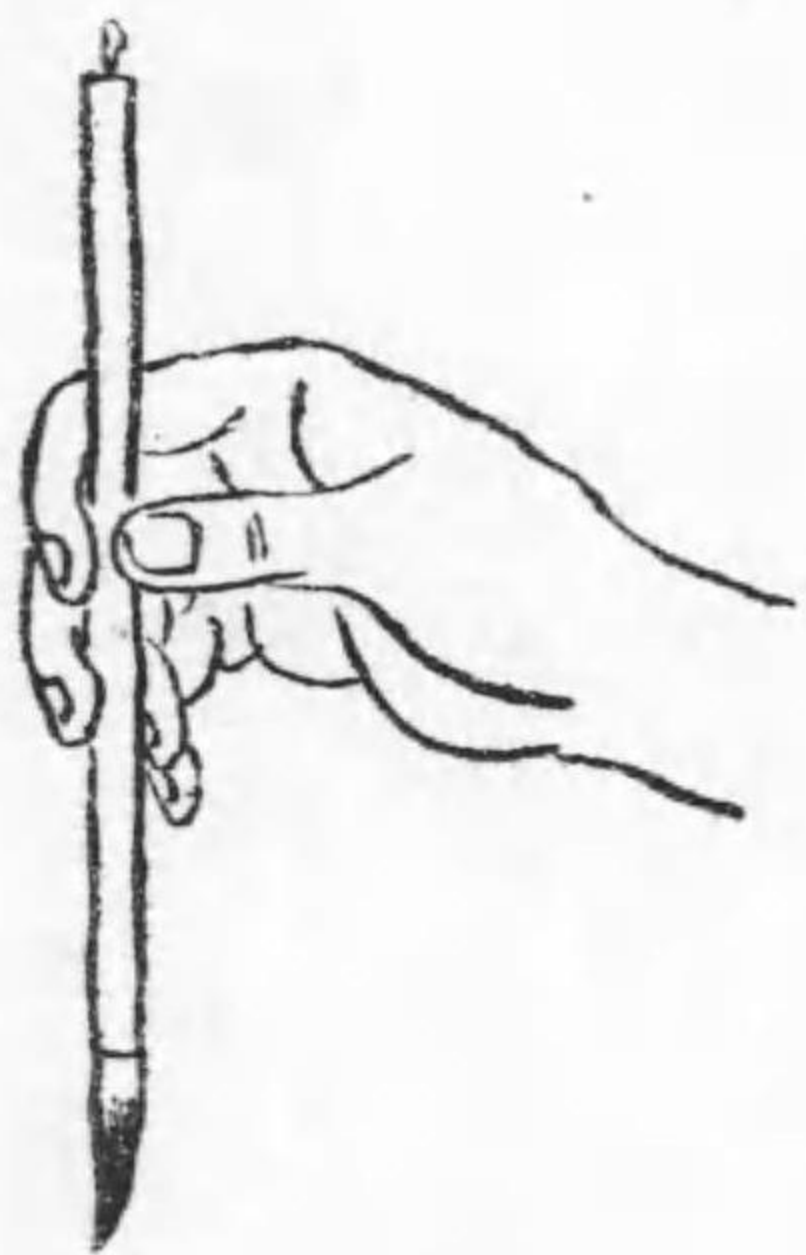
### 執筆法と腕法

字を書くには、先づ筆を持つ執筆法を必得て置かねばならぬ、之れには昔から單鉤と雙鉤との二つ  
がある、雙鉤とは食指（ひとさしゆび）と中指の二本を筆管に緩く掛け、拇指を其の食指の先に充て  
無名指は中指の下に、小指は中指の下に着くるのである、さうして掌は物を攫むやうな心持で、廣  
く虚にして置かなければならぬ、單鉤は筆管に食指一本を掛けて中指で受け拇指の先で筆管を抑へ  
支へるのである、此の雙鉤は大字又は細字を書くには宜しいのである、單鉤は草書を書く場合には  
宜しい。

夫から、執筆法に次いで、腕法のこと心得て置かねばならぬ、即ち腕法に懸腕、提腕、枕腕、の

三つがある懸腕とは臂を上げて書くので大字を書く場合に宜しい、提腕とは、臂を机上に着けて書く法で中字を書く場合に宜しい、枕腕とは右手腕を左手の手の甲の上に枕させて書く法で細字を書く場合に宜しいのである、さうして筆管を持つ程度は一定はしないが大抵、行書は筆管の中央邊りて、草書は其上に、楷書は中央の下に、細字を書く時は又其下に筆を執るのが普通の法となつてゐる。

執筆法



筆	臂	指	掌
ハ	ハ	ハ	ハ
直	舉	緊	空
グ	グ	ク	ク

八病勢のこと

字を書くに、昔から、八病勢、と云つて最も戒めてある、嫌ふべき悪癖がある「牛頭」と云つて、ごつ／＼して角張り、恰も牛の頭に似たやうなもの「鼠尾」と云つて、字先が段々細くなつて力なく丁度鼠の尾のやうなもの「蜂腰」として蜂の腰のやうに中間が切れさうに細くなつて力なく唯、首

尾丈が太くなつて格好の悪いもの「鶴膝」として鶴の膝のやうに大きく真直になつて妙味のないもの「竹節」として竹の節に似たるもの「折木」折れた木のやうに首尾共に書體を失つてゐるもの「稜角」ひだや角のある見悪いもの「柴擔」と云つて曲つてゐて力なく丁度肩に擔ぐ柴棒のやうなものが、それである左に掲げて之を示す。



結構分類字法

昔から手本としては、千字文とか、赤壁賦、などを書いたものであるが、文字の結構的分类字に、就いて書いたものは少ない、其れには、偏傍冠脊又は鈎合筆行の相倚り相類したる分類法を以て寄せたる字を習ふことが最も有意義で、且つ効果があるのである、依つて之を楷書結構分類法として、練習用手本としたのである。



注意事項に就いて

以上列記中に、永字八法、七十二例式、及び、楷、行、草、に於ける運筆法の書道練習に最も必要なることを述べてあるが、茲に注意事項として是非云はねばならぬことがある。  
 楷書のことについて云ふと第一、點のことである、此の點には字によつて打ち方が色々違ふのである、夫から撇字や捺字や勾字なども字によつて一々違ふのである、左に其例を擧げて之を示さんに。

對點 長點 仰點 顧點 抱點 勾點  
 小、不、受、立、戈、云  
 平點 啄點 長撇 曲撇 曲頭撇 豎撇  
 上、并、老、少、文、大

蘭葉撇 直條 垂針 平捺 曲頭捺 曲挑  
 米、川、中、送、又、氏

横挑 長曲勾 歲鋒勾 圓勾 長曲勾 戈勾  
 扎、狄、侃、阻、予、我

又、(之達) の如きも、四折四と云つた 展の方を用ゐて、 と云ふ如きに徐々に細太の所に注意し、最後に力を

夫から、行書、に就いて少しく云はなければならぬ、行書は前に述べた通り成る可く圓く軟かに筆を運ばせなければならぬ、殊に筆を下す際に、仰覆垂曲の運筆法を主とせねばならぬ、 (仰覆) 家 出 (垂曲) の如きが、それである、又懸珠

III (起轉合) の如きも作詩法のやうに起承轉合の法を取るのを普通とするのである、歸する所、行書の最も主とする所は字の續く所に力を入れず、字の切れ所に力を入れて、一折、一

抑、一仰、一覆、と云ふ心持で字の首尾に注意して文字の起應對向の所を研究せなければならぬ。草書、と云ふものは、楷、行の書體とは、餘程趣きを異にするものである、楷、行の書體は第一字體其物を主として字の形を能くすることが目的である、然るに草書は字形よりも寧ろ筆勢筆力に重きを置きて字配りを能くすることを貴ぶのである、此の筆力筆勢は、草書の生命で筆力筆勢がないと字形が好くても死字となつて見られぬものとなるのである。

夫から、草書は字のくづし方によつて色々書き方が異なり、一つの字に五つも十もくづし方がある(草露貫珠)、(草字彙)、などの本を見ると甚しきに至つては一つの字に十以上のくづし方があるが、普通は判り易い程度のくづし方を取るのが穩當である、然るにくづし方によつて如何にも紛らはしき似寄つた字が随分ある、譬へば、勾畫の長短によつて、(知)の字と(去)の字が能く似寄つてゐる、下畫を長く引くと知の字となり短く引くと去の字となるの類がそれである、斯やうな同形異字のものが澤山ある、左に其例を擧げて之を示してある。

此の外に、澤山あるが紛はしき字は可く區別の出来るやうに少しく違つた所ある點に氣を附けなければならぬのである、併し普通一般に用ゐてゐる、中略程度の字を常に用ゐることが最も宜しいのである。

(筆法圖解書道教本より)

名	召	台	王	玉	武	白	百	花	國
其	矣	莫	夾	奚	火	曾	差	具	苔
來	成	朱	米	禾	余	外	別	列	前
水	各	谷	永	泉	兩	卒	我	義	象
金	重	量	失	矢	去	知	天	與	足

香川松石書(筆法圖解)  
 ○真行三體千字文 送價一〇〇

巖谷一六書(筆法圖解)  
 ○真行三體千字文 送價一〇〇

卷菱潭書  
 ○真行三體千字文 送價八〇

片岡琴湖編 加藤樂山書  
 ○筆法書道教本 送價六〇

鐵耕杉山潤書  
 ○草人勅諭帖 送價五〇

岡山高藤書  
 ○禁庭の野分 送價四〇

附習字の心得  
 ○水書双紙 送價二五

昭和九年一月十日印刷  
 昭和九年一月十五日發行

定價壹圓

不許複製轉載



三體千字文

編輯者 書道研究會

東京市神田區錦町一丁目九番地

文仁會代表

富田長之助

東京市神田區錦町三丁目廿番地

今成溫平

印刷者

東京市神田區錦町三丁目廿番地

今成印刷所

印刷所

文仁會

發行元

東京市神田區錦町一丁目九番地

文陽堂書店

電話東京三三〇七番  
 電話神田三〇二一番

發兌元

終

